

論文の内容の要旨

論文題目 中国開発学序説
——非西洋社会における学知の特徴と可能性——

氏名 汪 牧耘

本研究は、中国の「開発学」(development studies)を手がかりに、その設立経緯と言説形成の過程を約30年間にわたって明らかにすることで、非西洋社会における開発の学知が持つ特徴と可能性を考察したものである。

論文は全11章からなる。序章では論文の全体像を説明した。本研究の問題意識は次の現象から生まれる。国際開発をめぐる知識は「欧米中心主義」の影響を受けながらつくられてきたという指摘がある中、中国人研究者は積極的に自国の開発を学術的に説明し、さらに独自の「新開発学」をつくり出そうとしている。現在の中国の開発学は、欧米がリードしてきたものに挑みつつも、それとは異なることが強調されている。しかし、過去を振り返ると、一種の言説上の隔たりが浮かび上がる。1990年代に開発学を国内の大学で設立しようとした中国農業大学の研究者は、西洋を敵対視するどころか、欧米諸国で学んできた開発に関する理念や方法を中国に導入し、普及させる方向に力を尽くしていたのである。

こうした中国の開発学をめぐる言説の変化が、この約30年間でどのように生じたのか。本研究では、この過程に着目し、「中国の開発学は、どのようにつくられ、どこに向かっているのか」という問いに取り組む。具体的には、①「中国の開発学は誰によって、どのように築かれてきたのか」(分野の形成)、②「中国の開発学の言説は、何を取捨選択しており、どのような妥当性を持っているのか」(言説の形成)という2つの側面に焦点を当て、その特徴を描き出す。それを通して、中国政府の意図や援助事業への賛否両論だけでは見えてこない中国の国際開発像を描き出し、非西洋社会における開発を語る糸口を示すことが目的である。

この問いへの切り口を探るため、第1章では、これまでの研究にある開発と言説を論じる多様なアプローチや欧米の開発学をめぐる議論の整理を踏まえて、中国の開発学を分析する際の着眼点を抽出にした。すなわち、①言説の作り手とその目的、②異なる言説の階層化、③核心となる言葉の概念的歴史、④言説形成に伴う実践をめぐる記述の取捨選択、という4つのポイントに目を向けることで、開発

学の創設の経緯と言説空間としての特徴を浮き彫りにすることである。

第2章では、こうした4つの着眼点を用いて、開発学や学知形成に関連する先行研究を中国の開発学の何をどこまで明らかにしたのか、残された課題とは何かを分析した。先行研究では、中国の学問形成に影響を与える主な要素として、中央政府の政策方針、文化や思想に基づく自他想像と専門分野の間の力関係を取り上げている。また、中国人研究者の動きに着目し、2010年代から中国国内で続々と設立された開発研究機関の力関係をした研究はある(着眼点②)。しかし、それらの研究は、本研究が着目する言説の変化の過程と議論の中身を論じてはいなかった。

中国の開発学の内実を解き明かすために、残された課題は第1章で挙げた言説分析の着眼点を踏まえて以下のように整理することができる。すなわち、「開発学」という名にどのような中国語の開発概念の歴史的背景があるか(課題1/着眼点③)、1990年代から、中国の開発学の創設に携わってきた中国農業大学の研究者は誰で、どのように開発学をつくろうとしてきたのか(課題2/着眼点①)、中国農業大学の研究者が生み出した諸言説は、何を、どのように取捨選択したのか(課題3/着眼点④)、という3つである。

第3章では、こうした3つの課題に応えるための調査対象と手法を説明する。具体的には、中国の「開発」概念の由来をひもとくための歴史研究、中国の開発学の設立と言説の変遷を整理するための文献調査、そして中国の貴州省と雲南省、およびラオスのルアンパバーン県といった中国の開発援助の現場を中心に実施した現地調査の概要を説明した。続いて**第4章**は課題1、**第5、6章**は課題2、**第7章**から**第9章**は開発学に携わってきた中国人研究者が打ち出した3つの言説を手がかりに課題3に取り組んだ。各章の概要と主な調査結果は以下の通りである。

第4章では、「开发/发展」(開発/発展)という言葉を手がかりに、中国の知識人が開発概念を20世紀頃の日本から輸入し、それが中国の文脈において変遷してきた過程を描いた。「开发」が有していた豊かな発想が近代化の波に飲み込まれるとともに、「发展」という比較的新しい用語が社会進歩や国家の繁栄を連想させるニュアンスを帯びながら、中華民国の建国から一気に普及したことが明らかになった。開発学は、中国語では「发展学」と記されており、その学問的性格も「发展」という言葉の属性によってある程度規定されているといえる。

第5章では、中国の「開発学の父」とも呼ばれている中国農業大学の李小雲氏の研究と実践を踏まえて、中国の開発学の創設を述べた。1998年に中国で創設された開発学部は、国内の農村問題の解決や経済発展を遂げるために、欧米の開発学を鵜呑みにすることから始まった。ところが、2000年代に入ると、欧米の開発学が疑われるようになった。高度経済成長を遂げている中国に対する国際的な評価が高まったことや、欧米中心の開発言説の虚構性を指摘するポスト開発論者の研究が輸入されたことなどはその背景にあった。さらに、中国人研究者はアフリカの現場体験や国内の開発実践を踏まえて、「西洋的な開発学」が主張してきた平等の理念や相手の主体性を尊重することは、大きな経済格差があ

る中では偽善に近いものだと批判した。

続く**第6章**は、開発学部がつけられた後の教育と研究活動に着目した。中国農業大学は、開発関連の教育・実習や国際的な交流を行なう場を設けることに積極的に取り組んでいる。2000年代半ばから、中国の開発学の射程は研究者ネットワークの拡大とともに、国内農村部の問題からアフリカをはじめとする地域研究や国際関係論などを含む開発援助へと広がっていた。欧米で活躍している著名な学者がその学術的なイベントに登壇し、さらに研究のアドバイザーを務めることが多々ある。さらに、2015年以降、中央政府の政策・方針にしたがって、中国農業大学の研究者が先頭に立ち、従来の開発学と比較しながら中国独自の「新開発学」のあり方を論じはじめた。

第7章から**第9章**は、上述した開発学の設立のプロセスにおいて、中国人研究者が中国の国際開発の特徴をより明確に際立たせるために打ち出した3つの言説の検証を行なった。**第7章**は、中国と西洋の開発理念が対立しているという言説に着目し、中国貴州省における世界銀行の融資事業を通して考察した。伝統ドナーの代表格である世銀の「理念先行型」の開発が中国には合わないという意見は現地でも多く聞くが、意見の食い違いがありながらも、現実的にプロジェクトをつくり上げてきた世銀、政府職員、村人、などといった諸アクターの「交渉」という工夫が、中国と西洋の二極対立を乗り越える鍵となった。

第8章では、中国の開発援助は「対等性」を重視する「平行経験」の共有だという言説を検証するために、中国の対ラオス援助の事例を取り上げた。中国人専門家は農村部出身者が多いため、ラオスの現地職員や村人と対等的な立場で接する側面が確かにあった。しかし、中国とラオスの開発援助における力関係と社会的・文化的差異の存在は否めず、事業を進めるにあたって一定の介入が求められる場面もあった。「対等・平行」の言説が中国の国際開発を説明する際の「常套句」になるにつれ、開発援助の関係者が自らの現場体験を再帰的に捉え、自分・他者への認識を改めるきっかけを見逃す恐れがある。

第9章は、日本という中国の開発学の形成に関わる重要な参照軸に目を向けた。具体的には、「日本には独自の開発知識がない」という中国人研究者の批判的な言説を取り上げる。この言説を支えたのは、中国の日本研究の主流を占める政治・経済・外交という国家主体の分析枠組みであり、そこで見落とされたのは戦争への反省や実践知の重視などといった、日本の知識人や学者が独自の開発知識をつくり出す際の制約と工夫である。日本の知的営みを否定した結果、中国が自らの開発言説を築く際の参照軸は画一化された「西洋」にとどまっており、開発知のあり方をめぐる普遍性の探求も阻まれている。

終章では、以上の調査結果を踏まえて、結論と考察を述べた。西洋的な開発知を批判し、自らの独自性を打ち出そうとする中国の開発学は、一見すると挑発的・異質な存在ですらある。しかし、その系譜に目を向けると、国や言語を越境してきた人びとの開発実践が目に見える。調査結果から浮き彫りになっ

たのは、中国の開発学は、表面上は欧米や日本を批判し対立しているように見えるものの、その構築を支えている開発実践の総体には、欧米や日本に共通する経験は少なからず存在し、外来の知的蓄積がそこに編み込まれている、ということである。このように、表に出る部分と出ない部分のコントラストは、中国の開発学の特徴だと考えられる。中国が打ち出してきた開発知を理解するには、表の差異ではなく、その地下にある概念や実践の関係性に目を向けることが重要である。

本研究の意義は、中国の国際開発をめぐる学知の形成がほとんど研究されていない中、中国の開発学を支える知の多元性を指摘し、さらに欧米中心につくられてきた開発学の系譜を相対化したことにある。中国以外の国・地域の開発学を論じる糸口を示したといえよう。他方で、本研究では、より広い射程の開発学や中国の事例の一般化可能性などといった点を扱いきれなかった。拡大する中国の国際開発への理解を深めるためには、複数の言語資料を交え、さらに多角的な研究が必要である。

(以上)